

土佐のドウロクジンから

神田 修

1、はじめに

もう 20 年も前のことになるが、当時在籍していた大学の雑誌にドウロクジンについての小文をものしたことがある¹⁾。民俗学において道祖神信仰の範疇で扱われる「ドウロクジン」は、元来「ドウソジン」や「サイノカミ」とは別系統の神様で、文字の力と「道祖神」という民俗学のテクニカルタームの二つによって道祖神に習合されてしまったのではないかということ述べんとしたものであった。それが十分に証明できたとは今でも思っていないが、久しぶりにこの神様について雑駁ながら考えていることを述べてみる。論述の都合上前稿の焼き直し部分もあるが、ご容赦願いたい。

2、土佐のドウロクジン

ドウロクジンという民間信仰の神様は、中部地方を中心に、東は東北地方、西は近畿圏まで分布する神である。日本全体で言うと東に偏した分布をする神様だが、なぜか飛び地のように高知にその姿を表す。それだけではない。分布の西端に現れたこの神は、東国のドウロクジンとは明らかに違った顔を見せている。²⁾

(イ)土佐郡本川村越裏門（現伊野町越裏門）

明治の末年頃、道のまん中にすわる時に、「ドウロク神様、よけて通らっしゃれ」といわねばならないなどといっていた³⁾。

(ロ)吾川郡吾北村小川新別（現伊野町小川新別）

道のまん中で腰をおろして休もうとするとき、ドウロク神とゆきあいになると、病気をしたいへんなことになる。腰をおろす前に、「道のドウロク神 よけて通らっしゃれ」といつてから腰をおろした⁴⁾。

(ハ)土佐郡本川村寺川・吾川郡吾北村小川（現伊野町寺川・同北村小川）

道のまん中にすわるものでないという。すわっていると、道礫神につきあたるといふ⁵⁾。

(ニ)土佐の山村に出る妖怪を言ふ諺に「山で芝天狗、川では猿猴、道では道礫神」と言ふ⁶⁾。

即ち行逢神のドウロクジンである。行逢神とは、これに不用意に出逢うと激しく崇る神で、著名な例でいえば西日本に多いヒダル神や、中四国地方のミサキ神等が挙げられる。今挙げた例からは、ドウロクジンが道、それも土中を彷徨しているらしいことが窺える。座る時の注意とされているのは、恐らく尻に敷いてはならない神だからである。そして、ドウロクジンに声をかけているところをみると、こちらからは見えない神であることもあるのだろうが、どうもこの神は目が見えないらしい。同じく盲目の神とされる便所神と行逢うのを防ぐために咳払い等をするのと類似した行動と言える。

また、この神様は、時間によって居られる所が違うという。

(ホ)幡多郡大正町打井川（現四万十町打井川）

ドウロク神は、午前中は道の沖側にいるので、その方には小便せられん。午後は道の山手

の方にいるので、その方に小便せられんという⁷⁾。

(へ)幡多郡大正町・同郡十和村 (現四万十町大正地域・十和地域)

道祿神は午前中道ぶちにおり、夜は山側におるものという⁸⁾。

一見、(ロ)や(ハ)の「道のまん中」云々と矛盾するようであるが、こうした考えは、同じくドウロクジンとの行逢いを避けるために案出されたものとする。

昔話の「小僧と和尚」の類の中に次のような話がある。道端で小用しようとする小僧(村の子供、旅の男とする例などもある)一に向かつて、和尚が「道には道の神がいるから」と、それを許さない。田にしようすると、今度は田の神様が居るからという。同じようにして山・川でも用を足すことを許されなかった小僧は、我慢しきれずに和尚の頭に小便をかけて、「カミがないのはここだけだ」という、たわいもないといえればそれまでの落とし話だが、この道の神の名がドウロクジンになっている例が、徳島県三好郡東祖谷山村中上、山形県東根市東根東方にある。道・田・川・山には各々それを領く神が居られるておちおち用も足せない。何もこのためばかりではなかろうが、ドウロクジンの居られる所が時間により変わるの、人間の側の都合で体よく線をひかれたとあって良いと思う。そして、これが更に範囲を限定されると、辻や村の出入り口のようにある一カ所で祀られる形になる。

(ト)長岡郡稲生村 (現南国市稲生)

土佐の長岡郡稲生村では旧の盆の十六日の宵には近くの四辻(四辻なら何処でもドウラクサマとして)へ行ってホウカイ(お盆の火)をたきます。これはドウラクサマに行路の災厄をまぬがれる様祈願をするのです。子供の時から「四つ辻には不意の死をした人の霊が集ってゐるからたたらん様によくおまいりせんといかん」と話された事です。一カ所ドウラクサマを並べて祭ってありましたが道路改修で最近一方が見つかりません。眼病に利くと云われてゐます⁹⁾。

(チ)香美郡土佐山田町楠目 (現香美市土佐山田町楠目)

ドウロク神といい猿田彦をまつる道案内の神と考えられていた。祀堂はもとより、神体として具象化したものは一木一石としてなかったが、かつては毎年の盆祭りの祭、おがらを挿入した小束のたいまつを九十センチメートルの青竹にさし、これを道の辻に立て、たいまつに火を点じ、白米をまき、水を注いで拝んだ¹⁰⁾。

(リ)四万十市西土佐江川

盆にはドウロクジンさんといって、夜松明を道端に立てる¹¹⁾。

四つ辻で祀られるドウロクジンである。(ト)で「不意の死をした霊」といっているのは恐らくドウロクジン自身のことだろう。加えて、眼病に御利益があると言っているのは、この神が盲目であるという仮説の傍証となる。

桂井和雄氏は『俗信の民俗』所収の「正月女覚書—辻祭りのことなど—」¹²⁾で、女性が正月松の内に亡くなることを忌む風習について述べている。松の内に女が死ぬと七人の女の友を引くので、それを防ぐために四つ辻に女たちが集まり供養をして、その後持ち寄った酒肴を出して辻祝いをする、といったものだが、高知市大津では、この時に祀る神が道陸神

であるといい、お花や菓子をお供えて「道陸神さま、どうぞ後をひきませんように」と祈願した。香美郡香北町橋川野（現香美市香北町橋川野）では、このときの言葉が「道陸神様どうぞ避けていてくだされ」となっていて、(イ)～(ハ)に通ずる心意が見てとれるのも面白い。同書所収の「土佐俗信抄」では、節分の晩、四辻に家族の年の数だけ炒り豆を捨て、「道のふちの道陸神さん、家族が息災でいられますように」と祈るという¹³⁾から、県中央部においては四辻にドウロクジンがいて、お祀りすれば厄災を避けてくれるという信仰があったらしい。ただ、民間信仰ではよくあることだが、守ってくれる神として祀っているのか、「崇らないでください」とお祀りしているのか、よく分からない。

以上、ざっと土佐のドウロクジンさんを見てきたが、同系統と思われるドウロクジンは、愛知・三重にも見ることができる。

(ヌ)ドウラクジン（伊賀全域）、ドウロクジン（西高倉、鶴山）は三ッ辻(中谷)、四辻(鶴山)等にいる。中谷ではこんな所を通る時はドウラクジンと名を呼んで祭れば良いといい、ドウラクジンに会えば足を怪我するとも言う¹⁴⁾。

(ル)三重県鈴鹿市 旧椿村・庄内村

道ろく神は季節によって、ござる所が違うという。土用の間は、土に杭を打ってはならない。道ろく神の頭にぶつかるからで、もし打つと罰があたる。杭は土用前に打てという。道ろく神は土の中の神様、だからどこでも小用するものではない¹⁵⁾。

(ヲ)愛知県北設楽郡稲武町大野瀬（現豊田市大野瀬町）

ドーロクジンといい、盆には花をお供え、正月にはニューギをお供えた。ムラの入口や出口に祀られている。ドーロクジンをかまうと腰が痛くなるといわれている。ドーロクジンは地神ともいい開墾したところに立っている¹⁶⁾。

さらに、徳島、京都、滋賀では次のようなドウロクジンもいる。

(ワ)徳島県三好郡でいうミサキは、やはり一種の靈魂であって川では川みさき、山では山ミサキ、道ではドウロクジンだといい、あるいは鳥のように飛ぶ神だともいう¹⁷⁾。

(カ)京都府北桑田郡知井村（現北南丹市美山町中ほか）

道を歩いてみて転んで膝頭など鎌で切られたやうなことがある。これを京都知井村その他ではカマイタチ又は道陸神にぶち当たったなどといふ¹⁸⁾。

(ヨ)滋賀県高島郡朽木村生杉（現高島市朽木生杉）

道を歩いていて突然思いあたるふしもないのに傷ついたり、ころんだりすることがある。そんなとき、ドウロクジンのたたたりだとか、かまいたちにかぶられたとかいう¹⁹⁾。

倉石忠彦氏は「道祖神信仰とサイノカミ地名」²⁰⁾で「道祖神」関係の地名を調査、整理している(図1)が、氏の整理をお借りすると、「ドウロクジン」と読める地名は信州、群馬、千葉から北関東、東北南部に濃く分布し、高知から近畿中京にかけてはほぼ確認できない。これは東のドウロクジンが石像や文字碑で祀られ、土地を占める神様であるのに対し、西のドウロクジンが一箇所にとまらず地中を彷徨い歩かれる神であることと対応しているのだと考えている。

3、「いわゆる道祖神」研究史

日本民俗学における道祖神研究史は、柳田國男の『石神問答』に始まる。ごく端的に言えば、民間信仰の道祖神は、記紀以来の書物に見える「塞神(さへのかみ)」の流れをひく境界防禦を本義とする神であると柳田は考えた。これに疑義を挟んでいるのは恐らく先述の倉石忠彦氏くらいで、民俗学を学んだことのある者ならば、ほぼ定説としてご承知のことと想像する。

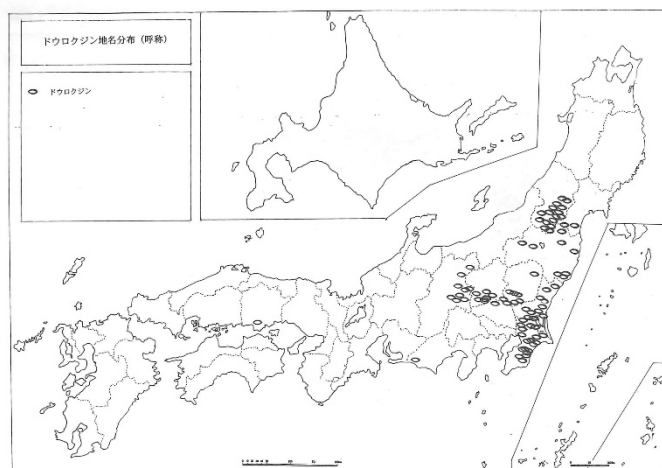


図3 ドウロクジン地名の分布(倉石2003より)

『石神問答』が書かれたのは日本民俗学史草創期のことであったが、この段階で早くもテクニカルタームとしての「道祖神(どうそじん)」(以下、テクニカルタームとしての道祖神を指すときは「道祖神」と鉤括弧付きで表す)が誕生し、「道祖神」は境界防禦の神なり、という基礎知識が成立した。やむを得なかった事とはいえ、以後の聞き書きでドウロクジンやサイノカミ、ドウソジンなどの名が出た際に「ああ、『道祖神』のことね。それは村境におられるのですか？」というバイアスのかかった質問と報告がなされがちであった事は想像に難くない。採集記録ですら“道祖神”と漢字で記録されていることも多い。ここで問題なのはこれではなんと呼ぶ神か分からなくなってしまうからで、呼称が違えばひとまずは別の神様かもしれないとして扱うのが筋だと思うが、こと道祖神に限っては古くから文献にもしばしば登場し、ある意味あまりにメジャーであったため、岐神も塞神も幸神も道祖神も、それから文献上はそれより遅れて登場する道陸神も、皆同じ神様の別名だとされた。理由は恐らく、祀られているところも似通っていて、字面も似ていて、なんとなく同じっぽいから。“いわゆる道祖神”と表現される所以である。

「道祖神」の範疇で扱われる神様の研究史の中で、取分け不幸な扱いを受けたのが、ドウロクジンであった。民俗学関係の辞典・事典類でドウロクジンを単独で項目に立てたものはなく、道祖神、あるいは塞の神の項に、「一般にサヘノカミと呼ばれ、また道陸神ともいう」²¹⁾、「サイノカミ・サエノカミ(塞の神)・ドウロクジン(道陸神)などと呼ぶ地方もある」²²⁾、「サイノカミともいう。道祖神と呼ぶ地方も広い。ドウロクジンとも訛る」²³⁾等とあるように、常に道祖神または塞の神の下位概念のように記され、これらの神の異名、転訛とされるにとどまった。繰り返すが、この神は民俗学の世界では何の検証も経ぬままはなから「道祖神」であると決められた神なのである。この歴史は江戸時代まで遡り、例えば、文政6年(1823)の『鹿島志』や、古い所では貞享3年(1686)の『百物語評判』巻三、「道陸神発明の事」の条に「先生の云らく、世人のいはゆる道陸神と申は、道祖神又は祖道とも云り、旅路のつつがなからん事を祈る神なり、左伝に祖すと云るも、此神を祭り侍る」²⁴⁾とあって、

江戸時代に花開く随筆類にもこの類の説が散見する。ただ、一方でドウロクジンさんも簡単には道祖神に吸収されなかつたらしく、例えば『俚言集覧』には「だうろく神 京都の東寺の道祖神をダウロク神と呼り。夫が今は何方にてもダウロク神と云也と云り」²⁵⁾とあって、ドウロクジン信仰が一時期かなり隆盛を極めたことを物語っている。それはそれとして、江戸時代の知識人たちがドウロクジンすなわち道祖神であると解釈した歴史があり、現在の民俗学もこの延長線上にあることを確認しておきたい。

4、ドウロクジンという名前

さて、今回改めて考えてみたい一つ目はドウロクジンという呼称についてである。神様なので失礼があつてはいけませんが、それにしても改めてよくよく考えれば奇妙な名前だ。分解すれば、恐らくドウロク・ジンの二つに分けられ、後のジンは「神」と解釈するとしても、「ドウロク」が分からない。『新編日本国語大辞典』によれば、盗人、テキヤ、大工などが使う隠語では「ドウロク」が「主人、旦那、男」を意味するらしく、「親ドウロク」といえば看守長、「うきすどうろく」で船頭を意味するそうだが、信仰と関係が見出せない。「道陸」という字碑で恐らく最も多いもつともらしい熟語も、『新撰字鏡』始め古漢字辞書類に現れないのみならず、諸橋博士の『大漢和辞典』などを見ても、やはりありそうでない。「道録」が道教関係の役職名としてあるにはあるが、関係がなさそう。江戸時代の節用集類を見ても、「道陸」「道陸神」「道碌神」等管見では見つけていない。節用集はいわば日常語の用字用語字典みたいなものだから、これはつまり一般的な語としては熟していないということだ。

ちょっと面白いのは、大島建彦氏が「藤六」という名にこだわった論文²⁶⁾で、『藤六集』の歌人と目される藤原輔相の歌の効用の逸話から始めて、最終的に「〇六」という名の人物がなぜか「強語り」や「をこの文学」に属する不思議を指摘していることなのだが、残念ながら今これを詰められる材料がない。

あるいは、この分け方が駄目なのかもしれない。明治に入ってから成立だが、『浪華百事談』巻九に、毎年11月16日、天王寺村(現大阪市天王寺区)で行われていたドウロクジン祭りについての記事があり、その中に「此祭りを道禄神まつりと云、それを後にあやまり、泥くじり祭とよべり」²⁷⁾云々という一節がある。ここから、当時天王寺村の人々がこの祭を「ドロクジリ祭」と呼んでいたことが分かる。著者(不明)は「誤りて」としているが、案外これがドウロクジンの語源なのかもしれない。「くじる」は『竹取物語』にまで遡る古語で、「物をつき入れてねじるほじくる。穴を掘る。えぐる。うがつ」等の意味を持つ。2で土佐から近畿、中京に分布するドウロクジンの姿を見てきたが、ここで改めて強調しておきたいのは、見てきた様な地中を彷徨って行き遭うと祟るという性格は、ドウロクジンと呼ばれる神のみに特徴的に見られ、一般的に「道祖神」の範疇に含まれるサイノカミ・ドウソジン・フナトノカミ等にはほぼ確認できないということだ。初めに述べたように、ドウロクジンは、どちらかという東に偏した分布を見せる神で、中部地方から北関東にかけて、ドウソジン、

あるいはサイノカミと呼ばれる神様と、もはやほぐすことができないほど信仰もお姿も縁起も祭りも混在して祀られている。ところが、その信仰圏の西の方では、サイノカミやドウソジンに見られない性格のドウロクジンが確認できる。ここから推測しうるのは、これがいわゆる「道祖神」信仰に収斂する以前のドウロクジンの古層を表しているのではないか、ということだ²⁸⁾。ということは、この神格がこの神の名の正体に近いかもしれないということで、地中を彷徨するという性格から考えれば、「ドロクジリ」は変な言葉だが無碍に否定もできない。

土地を領く神、それも地中を彷徨する神への信仰の痕跡は、全国各地に見ることができる。「蚯蚓に小便をかけると罰が当たる」という俗信がそれで、ドウロクジンは姿の見えないものなのだろうが、仮に姿を現すとすれば、丁度この蚯蚓に類似したものであろう。盲目の神とされるのは、こうした具体的な生物から考え出されたに違いない。

5、ドウロクジンの出自

民間信仰であっても、それが一定範囲の分布をみる場合、なんらかの宗教者の関与を考えるべきであろう。ドウロクジンの場合、それはどういった人たちだったのか。不完全ながら提出してご批判を仰ぎたい。

「北向きの道陸神」という慣用句がある。千葉県で他の人と違う変わり者の意らしい²⁹⁾が、同じ呼び名の神様が、菅江真澄の『くめじのはし』に見えている³⁰⁾。

「社の辺に立たる石をいや（礼）し、をがむ人あり。いかなる神にてかたとへば、いらへて、こは北むきの道陸神（トウロクシン）とて、ひのもとにただ三のおましある其ひとつなりとか。いはくらになりて、いもとせの中まもりませと行末を祈やすらん妻科の神」

信州妻科神社で社のほりにある立石を丁寧にはやむ人がいたので、何の神かと尋ねると、「北向きの道陸神で、日本にただ三つあるうちの一つだ」と答えたという。信州で「北向き」で著名なのは、我が故郷の別所温泉にある北向観音で、この仏さんと善光寺とは必ずセットでお参りせねばならず、どちらか一方のみで済ますことを「片詣り」といって忌んだ。妻科の北向きの道陸神がそれとなんらかの連絡あるのかどうか今のところ見当もつかないが、妻科神社は善光寺三社鎮守の一つであり、かつこの神社のある旧妻科村石堂（現長野市北石堂町）には刈萱山寂照院西光寺という寺があり、近くにある刈萱堂往生寺とともに刈萱道心と石童丸の親子地蔵を祀っている。その縁起譚と目される古説教「刈萱」にも実はドウロクジンが登場する。信州はドウロクジンが濃密に分布する信仰圏なので、単なる偶然かも知れないが、どうも引かかる。

「刈萱」は筑前刈萱荘領主加藤左衛門繁氏が家族を捨てて出家し、一子石童丸がその後を追ってきたが名乗りをあげずに別れるという子別れの話だが、繁氏が出家する場面で垢離をとり身を清め、誓文の段で次々と神の御名を唱えて神降しする中でドウロクジンが登場する。

「神をはじめ申すに、上には梵天帝釈、四大天王五道の冥官、大神には泰山府君、下界の

地にては伊勢は神明天照皇大神宮（中略）総じて山には木霊、石には梵天、海に八大龍王、川には水神、人の家の内に入りて、七十二社の宅の御神、二十五王のといのへっつい、道のはたの道陸神までも、ただいまの誓文に降ろし、勸請申す（後略）」³¹⁾

『御伽草子』の「ふくろふ」でも神降しにおいてドウロクジンと覚しい神が見える。「まず神おろしをぞ始めける。上は梵天帝釈、四大天王、閻魔法王、（中略）山には山の神、木には木魂の神、地にはたうろう神、河には水神（後略）」³²⁾

きちんと諸本を比較していないので本当は例として使ってはいけないのかもしれないが、この「たうろう神」は「とうろく神」の誤写か判読の誤りだと思う。

こうした神降しは中世から近世の文芸作品では珍しいものではなく、そこで地の神として出てくるのは堅牢地神の方が一般的だと思うが、文芸作品とはいえ神降しでドウロクジンの名が現れるということは、この神を含んだ文言で神降しをする宗教者が存在したのだらうということだ。また、同時に注目したいのは、刈萱の古い管理者が仏教徒、もっと限定することを許されるならば、恐らく時宗の系統の聖たちだったと考えられることだ。岩崎武夫氏は「高野山の萱堂聖や、善光寺周辺の石堂の聖の間で語られた話を統合したものに時宗化した高野聖の存在が考えられるが、彼らは高野山と善光寺を往還しながら説経『刈萱』の成立に深く関与したことはまちがいない」とする³³⁾。ドウロクジン信仰にこうした宗教者のなんらかの関与があったことまでは言ってもいいのではないかと現段階では考えている。

以上、土佐のドウロクジンの話から始めて、この神様の出生の秘密に迫ろうと試みた。力不足ではっきりしたところまで詰められなかったが、旅の宗教者が囁んでいるのだと現段階では考えている。その核は恐らくいくつかあって、今回は検討できなかったが鹿島神人などもその一つではないかと想像している。

【註】

- 1) 神田修 1996 「ドウロクジン小考」『藝文研究』第 74 号
- 2) 高知県のドウロクジンについては、近藤直也 2016 「土佐ドウロク神考—高知県下とその周辺におけるドウロク神関連の文献資料について—」『九州工業大学大学院情報工学研究院紀要人間科学篇』29 で膨大な資料を基に詳細な検討をされているのでこちらも参照されたい。高知県下にドウロクジン分布が見られる理由については、森納 1991 『補訂塞神考—因伯のサイノカミと各地の道祖神—』では山内一豊が遠州掛川から国替で土佐に移って来た時に一緒に移って来た人たちが持っていた信仰なのではないかとしている。
- 3) 文化庁編 1975 『日本民俗地図Ⅲ』国土地理協会
- 4) 前掲 3)
- 5) 前掲 3)
- 6) 桂井和雄 1977 「土佐山村の「怪物と怪異」」『旅と伝説』15 卷 6 月号(復刻版)
- 7) 前掲 3)

- 8) 桂井和雄 1985 「土佐俗信抄、妖怪」『俗信の民俗』
- 9) 橋詰延壽 1985 「ドウラクさま」『民間伝承』11 卷 11 号(復刻版)
- 10) 前掲 3)
- 11) 高知県教育委員会編 1998 『四万十川民俗文化財調査報告書』高知県教育委員会
- 12) 桂井和雄 1985 「正月女覚書一辻祭りのことなど一」『俗信の民俗』
- 13) 前掲 8)
- 14) 三重県教育委員会編 1972 『伊賀西部山村習俗調査報告書』三重県教育委員会
- 15) 『民俗探訪』(民俗学研究会、1972 年)
- 16) 堀川豊弘編 1987 『中部地方の石の民俗』明玄書房
- 17) 民俗学研究所編 1993 『民俗学辞典』東京堂出版の「みさき」の項。
- 18) 柳田國男編 1975 『山村生活の研究』国書刊行会
- 19) 前掲 3)
- 20) 『伝承文化研究』2 (2003 年)
- 21) 前掲 17) 「どうそしん」の項。
- 22) 『民間信仰辞典』(東京堂出版、1992 年) 「どうそじん」の項。
- 23) 『日本民俗事典』(弘文堂、1975 年) 「さえのかみ」の項。
- 24) 『徳川文芸類聚 4』(国書刊行会、1987 年)
- 25) 村田了阿編 1899・1890 『俚言集覧』皇典講究所印刷部。ちなみにまだ東寺の道祖神については、江戸時代の文献で見つけることができない。
- 26) 大島建彦 1985 「藤六の和歌と説話」『咄の伝承』岩崎美術社
- 27) 「浪華百事談」『新燕石十種 2』(中央公論社、1981 年)
- 28) 前掲 1)
- 29) 北村孝一監修 2012 『故事俗信ことわざ大辞典 第二版』小学館
- 30) 「くめじのはし」『菅江真澄全集』第一卷 (未来社、1976 年)
- 31) 「荳萱」荒木繁ほか編注『説教節』(平凡社、1973 年)。その後、繁氏出家しての名は刈萱同心は 13 年の歳月を黒谷の法然上人のもとで過ごす、一夜別れた妻子が訪ね来る夢を見て、女人禁制の高野山へ登ることを決意する。偶然だと思いが、黒谷を発ってから高野山へ赴く際に、「東寺の前を歩き過ぎて、先をいずくとおいそぎある。天王寺にお着きある云々」とあって、東寺、天王寺、いずれも江戸時代にドウロクジンが祀られていることがわかっている。
- 32) 「ふくろふ」『御伽草子』(有朋堂書店、1924 年)
- 33) 『新版日本架空伝承人物事典』(平凡社、2012 年) の「石童丸」の項。